

15 生殖医療センター



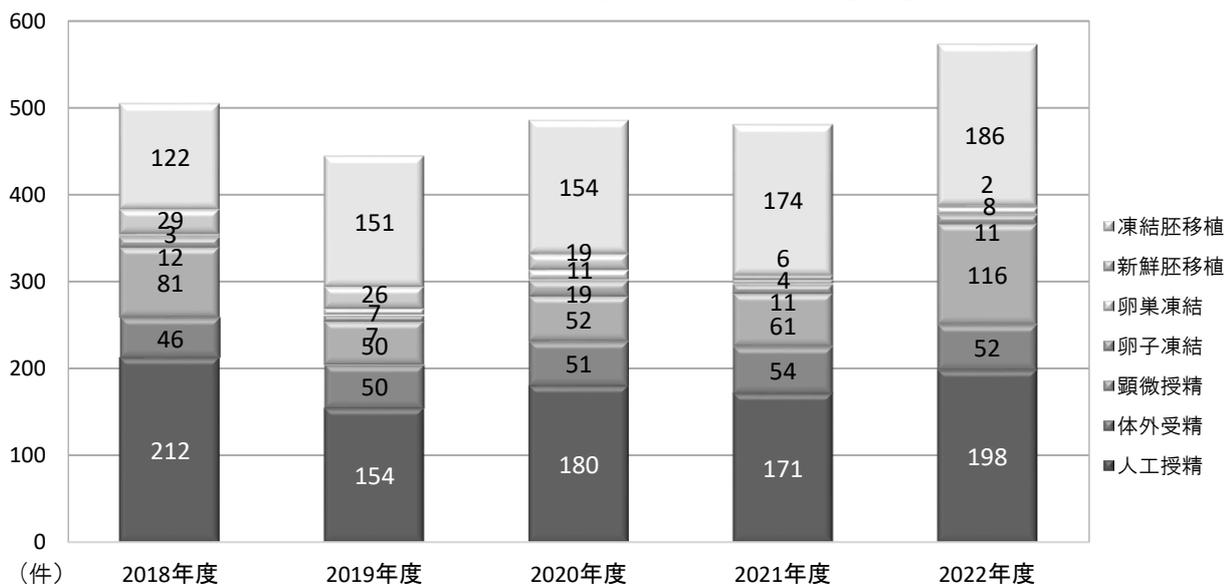
生殖医療センター設立後、10年が経過した。生殖医療センターでは終日外来診療を行っており、午前・午後とも受診可能である。生殖医療センターは大学病院特有の種々の合併症を有する患者さんが多いのが特徴であるが、若年齢から高齢の不妊患者さんまで、また患者さんの背景や不妊原因に応じて、性交のタイミング指導から体外受精・胚移植といった高度生殖補助医療まで幅広く診療を行っている。さらには子宮筋腫、子宮内膜症、卵管閉塞などの不妊原因となりうる器質性疾患を有する患者さんに対しては、腹腔鏡・子宮鏡・卵管鏡などの内視鏡手術を中心とした手術療法を実施しており、良好な治療効果が得られている。入院を必要としない外来子宮鏡手術を積極的に行い、患者満足度向上を目指している。

体外受精・胚移植や人工授精といった不妊治療が2022年4月より保険適用となった。これに伴って、昨年の新患者数、体外受精、特に顕微授精やスプリット法（多くは初回の体外受精に対して行われる）を行う患者さんが増加している。これまで受診を躊躇していたような方々の受診が促されているものと思われる。また、体外受精を行ってもなかなか妊娠が成立しない反復着床不全などの難治性不妊症や妊娠が成立しても流産を繰り返してしまう不育症患者さんに対しては系統的かつ最先端の検査を導入し、さらには自らの研究データに基づいた世界に先駆けた治療も導入し、可能な限り多くの患者さんと妊娠・出産の喜びを分かち合えるように努力している。

また、2016年1月に設立された「兵庫県がん・生殖医療ネットワーク」により、これまで卵巣凍結40件（2022年度8件）、卵子凍結65件（2022年度11件）を施行した。若年がん患者さんの妊孕性温存治療は、がん治療に影響を与えることなく、がん治療前にいかに迅速に行うかが重要である。そのためには、卵子凍結・胚凍結・卵巣凍結を柱とし、それぞれの患者さんにあった妊孕性温存治療を考え、早期に原疾患の治療を行えるように努めている。なお妊孕性温存外来は平日11時から毎日行っている。

今後もさらなる生殖医療センターの発展を目指して邁進していきたいと考えている。さらに、生殖医療・産科・婦人科・遺伝・出生前外来と全ての部門で密に連携をとることができる大学病院の強みを生かし、「兵庫医科大学で治療したい」と思ってもらえるような診療を心がけていく。

15-1 年度别人工授精・体外受精・顕微授精・卵子凍結・卵巣凍結・胚移植（新鮮・凍結）（合計573件）



15-2 年度別新規患者数

